

道徳 ジャーナル

現代的な課題 **キャリア教育特集号**

115号

- 21世紀 心の時代に
「好き」という気持ちを原動力に
下永恵美……………1
- 道徳授業 私の実践
・複数の教材（内容項目）を関連させた指導
本多茂光……………4
・自分との関わりの中で考え、議論するために
江藤由加梨……………5
- SDGs×道徳……………6
- どうなるこれからの道徳授業……………10



東京の住宅街で、小さな焼き菓子屋「シュシユクル」をやっています。開店して十四年。手作りのお菓子を並べて、お客さんを迎えるこの場所は、私にとってとても大切なところです。私は5、6歳の小さいころから「何でもやってみてみたい!」という子どもでした。特に好きだ

何でもやってみてみたい!

原動力に
「好き」という気持ちを

21世紀
心の時代に

ったのは、母を手伝ってパンやクッキーを作ること。日なたに置いたパンの種が発酵してふくらむのや、好きな形にするのがおもしろくて、夢中になりました。できあがったパンを家族が「おいしい、おいしい。」と食べてくれるのが、またうれしくて。

小学校の高学年になると、ひとりでお菓子を作って、友達にプレゼントするようにになりました。みんな、「手作りなの? すごいね」「おいしい!」と大喜び。自分で食べることよりも友達を喜ばせたくて、せっせと作っていました。

ほかにも、いろんなことをやってみたくて、バスケットボール、陸上、水泳などもやりました。ただ、そんなにうまくできるわけではありません。水泳教室では、平泳ぎが全然できなくて、コーチに足を持たれて指導されるほどでした。何とか頑張って練習していたある日、すう



パティシエ

下永恵美

つと泳げて「できた！」と思う瞬間があったのです。それからはぐんぐん泳げるようになり、市の大会で入賞しました。

そのとき、（あきらめないで続ければ、できるようになるんだ。）と感じたことが、ずっと私を支えてきてくれたように思います。

手仕事の楽しさを知った学生時代

進学した中学では「当番制で昼食を作る」というルールがありました。決まった献立に合わせて役割を分担し、下ごしらえ、調理、最後の後片づけまで。三十人で、約六百人分の昼食を作ります。

私は、当番の日が楽しみでした。手を動かして何かを作ることが好きだったのだと思います。

料理の工程を知ることにはわくわくしましたし、調理場の油の片づけや、掃除も苦にならないうタイプ。「汚れてるな」と気付くと、自然に体が動いてササツときれいにしたくなります。性格なのでしょうが、これはのちに仕事を始めてからも役に立ちました。

陶芸や織物にも挑戦し、休日は趣味のお菓子作りも続けていました。短大に進み、進路を決めるとき、（自分がいちばん好きで、みんなが喜んでくれることは何だろうか？）と考えたら、

やっぱり「お菓子を作ること」だったのです。

それから専門学校に入学し、お菓子作りの技術を学びました。同じ夢を持つ仲間と出会って、一緒にケーキ屋めぐりをしたり、充実した一年を過ごしました。

出会って、働いて、学んで

専門学校に通いながら、卒業後の就職先を探していたとき、とてもすすきなケーキ屋と出会ったのです。

（ここで働いてみたい。よし、聞いてみよう。）意を決してお店に飛び込んでいくと、なんとその場に社長さんがいらして、話を聞いていただき、採用になりました。ご縁としか言いようがありません。

「その笑顔があれば大丈夫だよ。」と書いていただき、プロのパティシエを目指す生活がスタートしました。

現場では、知らないことや、まだできないことがたくさん。三年半かけて、経験を積みました。お菓子作りの技術だけでなく、お店を経営するための知識、原価計算や売り上げなどについても教えてもらいました。

ダックワーズというお菓子があります。外側がサクッ、中がしっとりした生地でクリームを

挟んだ焼き菓子ですが、作るのが難しいのです。なかなかうまくできなくて、別の店まで教えてもらいに行きました。何度もチャレンジして納得するものが作れたとき「努力すればできる」ということをまた学びました。ダックワーズは、今のお店でも人気の商品です。

その後、別のお店で働いたあと、二十六歳のときに、シェフ（厨房のリーダー）として、最初のお店に戻りました。何でも教えてもらっていた新人のときと違い、今度は若い人たちをまとめ、指導する立場です。

自分がさっさと動くことが好きな私には、難しいことでした。上から注意するだけでは、その人のためにもなりません。どう声かけすればいいか試行錯誤しながら、ようやく人にすべて任せられるようになって、シェフを卒業しました。

それから、もっと外の世界を見てみよう、フランス料理の店で接客をしたり、フランスへ研修旅行に行ったり。他のシェフの方々と出会って刺激をもらい、またお菓子作りへの意欲が湧いてきました。

新たに二番手シェフとしてお店で働き始めましたが、仕事の進め方や人間関係で悩むことが増えました。純粹に、好きなお菓子を作りたい、という思いがふくらんで（自分のお店を持

とう。)と決意しました。

そうと決めたら、資金が必要。お店を辞めてアルバイトで百万円ためることにしました。早朝はパン屋、午後からはカフェ、と掛けもちでめいっぱい働きました。並行して、お店の場所探しも。店舗がずらっと並ぶ商店街より、住宅街がいいなとイメージしていましたが、なかなかいい物件がありません。

そんなある日、自転車で街を走り回っていたら、今の店舗に出会いました。おひさまの光がたっぷり入る建物で、中学校の目の前。通学路沿いに桜並木もあります。

「ここだー!」

駅から距離があるため、周りの人からは「大丈夫?」と心配されましたが、迷いはありませんでした。

やきがしやシュシユクル開店

自分のお店を始めるにあたってこだわったのは、お客さんから厨房が見えるようにすること。私も子どものころから、お菓子ができる過程を見るのが大好きでしたし、焼きたての香りも届けたい。子どもたちがお金を持っておやつを買いにきてくれるような、そんなお店にしたいと思いました。

店名はフランス語でお砂糖や甘いという意味の「シュクル」に、かわいらしい響きをつけて「シュシユクル」に決めました。

そして、お菓子を入れる箱や紙袋のイラスト。私には希望がありました。

学生だったころに参加したお菓子教室の看板が、絵本「ぐりとぐら」で有名な山脇百合子さんの絵でした。そのかわいらしさに感動し、「もし将来、自分のお店を持つことがあったら、こんなイラストの包装紙にお菓子を包みたいなあ。」なんて、夢見ていたのです。娘さんが私と同級生だったご縁もあり、オープン前に思い切ってお願ひしたら、快く引き受けてくださいました。「シュシユクル」にびったりの絵が仕上がり、夢がかないました。



お店には、保存料を使わない焼き菓子を、約六十種類並べています。お客さんが「どれにしようかな。」と、時間をかけて選ぶ様子を見るのが幸せなときです。

子どものころに、パンやクッキーを作るのが楽しくて大好きだったこと、家族や友達が「おいしい!」と喜んでくれたこと、それが

私の原動力になって、ここまで進んでこられたと思います。つらいこともありましたが、その時々で助けてくれる方たちがいました。

「お菓子作るの、楽しいな。」という気持ちを味わってほしくて、子ども向けのお菓子教室も開いています。使う材料は、家で再現できるように、スーパーで普通に買えるもの。「また作りたいよ!」と聞くと、喜びが胸に広がります。

私の目標は、「シュシユクル」で、お菓子作りの仕事を続けていくこと。何度作っても、いいタイミングでベストなお菓子ができたときは、心からうれしいです。食べてくれたみんなが笑顔になることを願って、これからも作り続けていきたいです。

(取材・文／古藤ゆず 写真／田口周平)



道徳授業私の実践

複数の教材（内容項目）を関連させた指導

神奈川県川崎市立長尾
小学校教諭
本多 茂光

他教科は、単元の計画が当たり前。道徳科でも、複数の内容項目を関連させた指導が生かせると思い、今回の実践を提案する。

○実践テーマ「人との関わり」

三つの教材で計画をした。大きなテーマとして人との関わりについて子どもと共に考えていくことを目的とした。



授業の概要

○主題名 友達だからこそ

○教材名 「ロレンゾの友達」(新・

みんなの道徳6)学研)

○教材について

登場人物の三人が、共通の友達であるロレンゾが罪を犯したという情報に對して、友達としてどのように対応すべきかをそれぞれの思いを基に考える。三人ともロレンゾのことを懸命に思い、考えていく内容である。

○内容項目 友情、信頼

○ねらい 友達のためにできることを考える中で、相手を信頼し、友情を築こうとする思いについて考えを深める。

授業の実際

【事前指導】

既習の内容項目である「相互理解、

寛容」と「公正、公平、社会正義」の教材と合わせて「人との関わり」について考えていくことを伝える。

【導入】

○今までの学習を振り返る。

相手を理解すること、公正で公平な態度でいることを学習したことを振り返り、本時の学習でも「人との関わり」について考えることをおさえる。

○「友達だからこそ」で考えることを発表する。

友達だからこそできること、難しいことを想起させ、教材に入る。

【展開】

○三人の友達の価値観を知り、共感できる部分について話し合う。

それぞれがロレンゾのためを思い考えている。その価値について考える。
・間違ったことは正すべき。でも、彼なりの理由があると思う。
・よくないことだけど、友達を信じて任せる。自分も裏切りたくない。
・友達を正しい道に。自分も友達もよくなるため、先のことを考える。
・話を聞き、本当の理由や思いを知り、信頼できるようにする。

○友達のことを考え、友情のために必要な考えを話し合う。

友情や信頼関係を築くために大切にしたいことを考える。

・考え方が人それぞれだからこそ、相手のことを理解し、考える。

・A君(前の教材)のように、相手の立場を考え、信じる。

・友達のために正しいと思うことをできるようにする。

【終末】

○友達についての作文を紹介する。

おわりに

三つの教材で考えた「人との関わり」について、単元を通した振り返りを行った。相手の立場を理解し、周りに流されずに、正しい行動をする大切さや難しさを考えたことで、友達との関わり方について、複数の道徳的価値で考えることができた。

一つの課題に対して、多面的・多角的な考えを引き出す計画的、発展的な指導から、子どもが自身のことを広い視点で考えられるよう実践を重ねたい。

(ほんだ しげあき)

道徳授業私の実践

自分との関わりの中で考え、

議論するために

教材について

○主観名 相手のことを考えて

○内容項目 親切、思いやり

○教材名 「ぐみの木と小鳥」(『新・みんなのどうとく 2』学研)

○ねらい 相手のことを考えて親切にしたら、相手も自分もうれしくなることに気付き、進んで親切にしようとする心情を育てる。

授業の実際

【導入】

親切な行いの動機となっている心に注目させるために、「親切にしている

福岡県福岡市立大池
小学校教諭
江藤 由加梨

時、どんな心がはたらいていますか？」という発問をしました。すると、子どもたちが考え込んだため、そこから「親切にしている時の心について考えよう」というめあてにつながりました。

【展開】

中心発問では、やみそうにない嵐を見ながら、じっと考えている小鳥の気持ちについて話し合い、その際、小鳥の気持ちにより共感させるために、嵐の映像を見せながら役割演技を行いました。子どもたちは「わあ、ひどい。」「これは無理だ。」と言葉をもらし、小鳥になりきって考える姿が見られました。ここで、「いつまでもやみそうにない嵐を見て、じっと考えていた時、小鳥はどんな気持ちだったでしょう？」と問いました。「りすさんのためだから、行かないと。」など、相手のことを思う発言が多く聞かれたため、二つの補助発問を通して深めました。

一つ目は、揺さぶりの発問です。「自分も嵐に吹き飛ばされるかもしれないのに、それでも行く？」子どもたちは、「嵐はこわいけど、ぐみの木さんの友達のほうが大切だから。」「りすさんが心配だもん！」と発言し、嵐を前に尻込みする弱い気持ちや、りすに寄り添う強い気持ちが出てきました。

二つ目は、仮定的に考えさせる発問です。「もし、りすさんのもとへ行かなくなったら、小鳥はどんな気持ちになりますか？」子どもたちは、「行かなかつたらりすさんが死んでしまうかも」と思って、悲しくなる。「ああ、どうして行かなかつたんだろうっていう気持ち。」と、発言し、それを聞いた別の子が「ああ、後悔ね！」と納得する場面が見られ、相手だけでなく自分自身の気持ちにも関わってくることに気付かせることができました。

次に、りすにぐみの実を届けて、「ありがとう」と言われた時の気持ちを考えられるよう、役割演技を行いました。

した。「今、どんな気持ち？」と聞くと、演じた子は「うれしい！」「ほかの森の動物たちもうれしくなる。」「もっと毎日ぐみの実を持っていこう。」と、親切にしようとする意欲や第三者への視点の広がりが見え、返答がありました。

最後に、板書を基に振り返り、確かめました。



【終末】

自己の生き方について振り返る活動を行いました。子どもたちは、「Aさんが体育館に赤白帽子を忘れていたので、持って行ってあげました。Aさんが困るかなと思ったからです。」などと述べ、これまで自分がしてきた親切な行いの中に、相手のことを考える気持ちがあったことに気付かせることができました。これらの考えを価値づけることで、温かい雰囲気の中で授業を終えることができました。

(えとう ゆかり)

〈対談〉

SDGSX道徳 連載第十一回

SDGSXキャリア教育

株式会社植松電機

代表取締役

植松 努

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)

理事

木村 大輔

未来を担う子どもたちがそれぞれの生き方を見つげるため、どんなサポートをすればよいかお話を伺いました。

さまざまな巡り合わせ

司会 まずは、ご自身のキャリアのきっかけや転職となった出来事について教えてください。

植松 僕が三歳の時に、アポロ十一号が人類史上初の月面着陸を成功させました。その様子は忘れましたが、一緒にテレビを見ていた祖父がとても喜んでいたのを覚えています。以来、大好きな祖父の笑顔を見たいという思いから、ロケットや飛行機を作る会社で働くことが僕の夢になりました。大学卒業後、飛行機的设计に関わる仕事ができな時はうれしかったです。

ところが、入社して二年ほど経ったある日、

ふと「僕の夢はすでになくなってしまった」ということに気付き、先の自分が見えなくなりました。毎日夜遅くまで仕事をして、休日は何となく街に出て遊び、お酒を飲んで……。心の片隅に虚無感のようなものを感じていたのです。

結局、約五年勤めて退職し、地元の北海道に戻りました。父の仕事を手伝うところから再スタートしたのですが、どうも父との折り合いが悪い。そんな時、リサイクルの仕事で困っているという人から、電磁石が欲しいと相談を受けました。そこでマグネットを開発すると、特許を取ることができました。

これを機に、「株式会社植松電機」として法人化し、本格的な事業をスタートさせます。当時の僕は、「このままずっとリサイクル関係の仕事をしていくだろう」と思っていました。いろいろな巡り合わせがあって、北海道大学大

学院工学研究科教授の永田晴紀先生と知り合いました。永田先生が安全なロケットエンジンの開発をしているというので、「安全なら僕たちでも造ることができませんか？」と聞くと、先生は「そうですね」と(笑)。「ならば、一緒に開発をしましょう」と話が進み、現在に至ります。

木村 私はキャリアの転職について振り返ってみようと思います。父が体操の指導者をしていた関係で、私は幼いころから体操競技をやっていました。夢を持ち頑張ったのですが、かなわない現実にはぶつかりました。何を目指したらいいか分からず迷う中で、英語を使って仕事をしたいと思うようになりました。

内閣府の国際交流事業に参加し、自分で希望して開発途上国へ行き、自分が生きてきた環境とは全く違う世界を目の前にして衝撃を受けました。インドで出会った物乞いの子どもたちに対して何もできない自分への嫌悪感や、搾取され続ける人たちを生む社会構造に対して怒りを感じ、「社会を変えたい」「自分にできることはないか」と考えるようになりました。

懸命に勉学に励み、金融業界へ進みますが、専門性を養う必要を感じ、大学院で開発援助の勉強をしました。院卒後の就職活動で外資系金融機関の内定が出ましたが、リーマンショックの影響で取り消されてしまいました。



植松努さん（リモートで参加）

「ならば、自分の力でやっていこう」と、フリーのコンサルタントとしてスタートしました。さまざまな仕事をする中で、友人から声をかけてもらい、GIFTに参画しました。

「どうせ無理」に挑んだロケット開発

木村 ロケット開発をすることになったきっかけを、もう少し詳しく教えてもらえますか？

植松 株式会社植松電機を設立したのは、僕が三十四歳の時です。売り上げも順調でいい気になっていました。ところが、世の中は甘くありません。大手企業との独占販売契約が反故になり、二億円の借金を抱えたのです。僕は猛省

し、会社の仲間の暮らしを守るために全国各地にでかけてマグネットを売り込みました。ところが、さらにひどい目に遭い……。「やられる前にやらない」と、法律を勉強して、会社の利益を得るためにあらゆる手を尽くしました。

当時の僕は、自分のことに必死で、相手にも僕と同じように仲間や家族がいることをすっかり忘れていました。何もかも合理で考え、勝つことだけに執着しました。自宅では「遊んで！」とせがむ娘の相手さえ面倒くさくなり、全部捨ててしまいました。

そんな時、友人から児童養護施設でのボランティアに誘われます。僕たちが行くと、最初は知らない人を警戒し、子どもたちは誰も近づいてきません。それでも、一日過ごすうちになれてきて、夕方近くなると「帰らないで！」「だっこして」とよじ登ってきます。

ある子が自分の夢を僕に教えてくれました。それは「親と一緒に暮らすこと」。僕は愕然としました。「なぜ、自分を傷つけた親を愛しているのだろうか」と。どれだけお金を寄付しても、僕はこの子を救うことができません。なぜなら、寄付したお金はぜんぶ親に渡って子どものためには使われないから。ならば、うちの子にしようかとも考えましたが、とんでもない！僕はさっきまで、自分の娘さえ捨てようと思っ

ていた人間です。

僕がしてきたことは、人を負かすことと、食べていくためには仕方ないと働いてきたことだけです。そんな自分をすごく恐ろしいと思いました。

僕は子どものころ、学校にも家にも居場所がなく、叱られてばかりで、すべて「自分のせい」「自分が悪い」と思っていました。そこでたたき込まれたのは、「どうせ無理」という言葉です。暴力や自信剥奪は連鎖します。この連鎖に陥ると、攻撃先は自分より弱い者、つまり子どもたちへと向かいます。連鎖を止めるために、「どうせ無理」という言葉をこの世から無くそう、そうすれば児童虐待は無くなると思いました。そのため、誰もが「どうせ無理」だと思込まれていることに挑まなければならぬ。このタイミングで永田先生から電話があり、「ロケットの実験をしたいが、場所も予算も無い」と言うので、逃してはならないと思い、ロケット開発に挑むことにしたのです。

成長を感じたとき、自信が生まれる

木村 「ロケットを造る」と聞くと難しく感じますが、意外と簡単に造れるものなのではないか？

植松 はい。ロケットを発射させる原理はそれほど難しくありません。教室では、子どもたちに講話をして、その後一人一本ずつロケットを造って打ち上げます。子どもたちの感想文には、「宇宙に興味を持ちました」「ロケットに興味を持ちました」ではなく、「夢をあきらめません」と書かれてあります。それがとてもうれしい。

作業中は、みんなワクワクしています。僕がまず一本打ち上げて見せると、子どもたちは大興奮。時速二百キロ程度で、上空百メートルくらいまでは飛びます。続いて、子どもが自分で造ったロケットを打ち上げる番になります。なぜか急に怖くなる。「自分のロケットはきつとダメ（飛ばない）だろう」と。さっきまで「飛ばしたい！」と目を輝かせていたのに、発射ボタンを押す手が震えたり、ボタンが押せなかったりする子が出てきます。でも、ロケットは飛びます。ここで大きな変化が起きる！みんな優しくなるのです。

多くの子どもたちは、他人と比べることで自信を身につけてきています。順位が上がれば、勝負に勝てば自信が増える。勝ち負けで判断する大人が世の中に多すぎます。勝つとは誰かが負けること。順位が上がれば誰かが下がる。負けた人の自信はどうなるでしょう。

一方、ロケットの打ち上げは、「無理だ」と思っていたことが「できた！」に変わる絶好の機会です。幼いころの、立った、歩いたといった小さな自信と同じもの。これこそが本当の自信なのだと思います。子どもたちに自信を取り戻してほしくてロケット教室を開いています。

褒めずに、感謝する

木村 子どもたちに寄り添うときに、どんなことを意識していますか？

植松 基本的には褒めません。褒めるという行為は評価だと思うからです。僕は感謝を心がけます。例えば、ロケットの不具合を見つけて「これは大丈夫？」と聞いてきた子には、「打ち上げ前に見つけてくれてありがとう」と言います。部品を斜めに接着してしまった子に、僕が接着を外しながら「向きは斜めだけどこの接着は完璧だ。このくっつき方ならバッチリだ」と言う心安みます。会社の人々に接するときも同じです。「こんなことができるようになったのよかったの！」「助かるよ。ありがとう」と感謝の言葉で伝えるようにしています。

木村 素晴らしいアプローチでも勉強になります。最近は自信がないだけでなく、最初からあきらめてしまう子どもも多い気がしま

す。そんな子の自信を育むためには、どんなことが必要だと考えますか？

植松 ロケット教室は基本的に学校単位で引き受けます。理由は、来たい人、関心がある人だけを対象にすると、前向きな人しか来ないからです。やりたくないと思っている子にこそ来てほしいから学校単位なのです。

そうすると、必ずつらそうにしている子を見かけます。感想文には「実は（自分は）死のうと思っていました」と書くような子が各学校に必ず何人かいます。僕はなぜか、そんな子を見つけてしまうようなのです。その時僕が最も心がけるのは「頼る」ということ。お願いして頼って感謝すると、その子の中に「人から（自分が）必要とされた」と、自信につながる記憶が残るように思うからです。些細なことでもいいです。

四年間、学校で一言もしゃべったことのない子が、ロケット教室に参加して話せるようになったこともあります。どんな変化が起きたのか僕には分かりませんが、生きていくために自信は必要です。子どもたちが自信を得てくれていることがとてもうれしいです。

木村 SDGsに関する教育活動中に生徒から、「感謝の気持ちがあるか」とする原動力になる」という話が出ました。誰かに何かし



木村大輔さん（リモートで参加）

でもらった、認めてもらった、助けてもらったことから相手への感謝が生まれ、何かしたいと思っただけです。感謝から始まる学びがあることを実感しました。

未来を明るく想像するために

司会 話は変わりますが、植松電機の社員へのキャリア支援はどんなことをされていますか？

植松 当社には部署のくくりと役職がありません。僕は一応、社長をやっていますが、日本では経営者が連帯保証人にならなければならないのでやむをえないのです。また、上から下への

命令系統も存在しません。面白いプロジェクトがきたらやりたい人を募り、手を挙げた人が担当して、みんなで助け合います。当社にあるのは「相談・お願い・感謝」です。これで十分に機能します。

昇給は、生活に関わるお金の変動に対応します。結婚や子どもの誕生、進学、親の介護などがある時期は、必要なお金を増やさなければいけませんし、お金がかかると減らさなければいけませんし、お金の感覚がなくなれば減らさなくてもいいという感じですね。これが会社のみならず、個人にとっても悪くないようですね。

しかも、当社には自己裁量権しかありません。僕は、自己裁量と幸せは比例していると考えて、この制度を採用していますが、満足度は高いように感じます。当社の目標稼働率は三十パーセント。残り七十パーセントは今までやったことがないことをやる時間になっています。だから新規プロジェクトがたくさん入ります。当社はロケットの会社だと思われていますが、人工衛星も造っていますし、無重力の研究もしています。ほかにも、医大と組んで医療機器を作ったり、冒険家と協力して南極探検用のソリを作ったりもします。

いろいろなことに挑むのは、うちの会社の人たちがロケットを造ったからなのです。自分が関わったロケットが猛烈な勢いで飛ぶのを見た

時、彼らの心の中で「できなかったことができ」という自信が生まれ、新しいことに挑戦しようという意欲を生んだのだと思います。

木村 主体的に考える力の育成を考えたときに、自己決定は非常に重要です。自分で考えて実行できる、新しいことに挑戦できる組織づくりは、学級経営にも生かせると思います。

一方で、シンガポールでは挑戦を促しながら、同時にリスクを計算する方法を学ばせるところが重要です。挑戦することで生じる影響を多角的に検討することで、リスクはリスクではなくなるという考え方は、ここでは、失敗はリスクを計算するための貴重なデータです。クラスで失敗をした子がいたら、「参考になる貴重なデータを生んでくれたね。ありがとう」という感謝に変えれば、子どもたちにとって挑戦は恐れではなく前向きなものになると思います。

植松 失敗が罪悪だというような考え方は世の中から無くしたいです。すべては経験。経験を重ねることを恐れず挑むことで、新しい世界が広がります。未来を明るく想像できるようになります。そこから「(自分は)どんな生き方をしたいか?」という問いに対して積極的に考えられるようになると思います。

(取材・文/岡本侑子)

どうなるこれからの道徳授業

連載17回 キャリア教育編

とくちゃん

監修・法政大学兼任講師 廣瀬仁郎先生
マンガ・のはらあこ

学先生





将来つきたい職業

- 1位 パティシエ (ケーキ屋さん)
- 2位 YouTuberなどのネット配信者
- 3位 医師 (歯科医師含む)
- 4位 警察官
- 5位 プロサッカー選手
- 6位 漫画家・イラストレーター
- 7位 研究者
保育士・幼稚園教諭
看護師
- 10位 プロ野球選手
学校の教師・先生

「小学生白書Web版 2021年8月調査」
より (学研教育総合研究所)

すべての道は、
キャリアに通ず!!

プロ野球選手の生き方から
学ぶ教材 (向上心、個性の伸長)

選手が使うグラブを作る
職人の思いから学ぶ教材
(希望と勇気、克己と強い意志)

内容項目の違う二つの教材を
つなげて扱うことで、子どもたちの
多様な考えを引き出す「ユニット学習」
も効果的だよ。



選手と、
選手を支える人、
両方の視点から
考えることが
できるんだね。



次回は多様性の
扱いについてご紹介!

次は終点○△、
終点です。



今度の校外学習と
道徳科の授業を
つなげられるか考えてみるよ!



キャリア教育も
教科横断的に扱うことで
より学びが深まるね。

道徳ジャーナル115号 令和4年11月発行

発行所 株式会社Gakken 発行人 甲原 洋 / 編集人 麻生征宏

本誌のお問い合わせ先…学校・社会人教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp> ●「道徳ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。

9300008478

LINE 公式アカウントのお知らせ

(株) Gakken おんたま先生

体育・保健体育や道徳、特別支援教育、ICT 教育などの最新情報の配信や、先生のお悩みを投稿できるサービスを提供しています。

友達
募集中!



QRコードをスキャン
するとLINEの友達に
追加されます。